
 学 会 記 事

第18回新潟てんかん懇話会

日 時 平成8年11月9日(土)
午後3時～6時

会 場 新潟大学医学部
第2講堂

I. 一般演題

1) てんかん患者にみられる精神症状について

前田 雅也・和知 学 (国立療養所西新潟
中央病院てんかん
センター精神科)
笹川 睦男・長谷川精一
金澤 治 (同 小児科)
亀山 茂樹・福多 真史 (同 脳神経外科)

【緒言】てんかん患者では、精神症状の併発によって社会的自立が困難となっている例がしばしばみられる。発作の抑制とともに精神病状を把握し対処することが、てんかん患者の治療の上で重要である。精神症状は発作に関連して主に意識障害時に出現するものと、意識障害を伴わずに出現するものとに分けられるが、今回我々は意識障害を伴わずに出現する精神症状のうち、分裂病様症状や躁うつ病様症状などの精神病症状について調査した。

【対象、方法】1995年7月から96年9月までの15カ月間に国立療養所西新潟中央病院てんかんセンター精神科を受診した16歳以上のてんかん患者を対象として、診療録をもとに精神病状を呈した症例の特徴について検討した。

【結果、考察】精神病症状の出現頻度は対象患者681名中39名(5.7%)で、分裂病様症状が29名(4.2%)、躁うつ病様症状が10名(1.5%)であり、従来の報告とはほぼ同様の値となった。てんかん罹病期間の平均は分裂病様症状群は23年で分裂病様症状のみられぬ群の18年に比して有意に長かった。躁うつ病様症状群のてんかん平均罹病期間は21年であった。てんかん発症から精神病症状出現までの期間に関しては10から22年という報告が目立つが、今回の調査でも平均16から17年を要しており、先行研究を支持する結果であった。てんかんの類型別に精神病症状の出現を調査したところ、症候性局在関連性てんかんと特発性全般性てんかんのみに症状出現がみられ、

また局在関連性てんかんと全般性てんかんと比較では、前者に精神病症状出現頻度が高い傾向がみられた。分裂病様症状の状態像としては慢性の幻覚、妄想状態が最も多く、躁うつ病様病状では挿間性と慢性の抑うつ状態がほぼ同数認められた。てんかんにみられる分裂病様症状は精神分裂病と比して陰性症状や自我障害の出現が少ないとされており、今回の調査でもその傾向は認められた。さらに分裂病様症状を有するてんかん患者と精神分裂患者では、対人関係における暖かさに顕著な差異が認められる印象を持った。頭皮上脳波による棘波の局在と精神病症状との関連は認めることができなかった。抗てんかん薬と精神病症状との関連に関しては、ゾニサミドが関与していると考えられる希死念慮を伴う抑うつ状態が1名認められ、ゾニサミド使用時には精神症状の評価に十分注意を払う必要があると思われた。

2) 経過中に運動性失語状態を呈したてんかんの1例

東 條 恵

(新潟県立はまぐみ
小児療育センター
小児科)

竹内 菊博・笠原 良隆
壁屋美奈子・岡田 立平 (刈羽郡病院小児科)

症例；現在14歳6カ月男児。診断；軽度精神遅滞、てんかん(単純部分発作、二次性全般化発作疑い)、不器用、後天性運動失語、場面かん黙傾向。病歴；8歳8カ月、口を少しあけ、顎をがくがくさせることが、週1から2回出現し、徐々に眼球上転を伴うようになった。発作は睡眠中は1度だけ、後は覚醒時であった。脳波で多焦点性棘波(右C、左mT)、頭部CT、MRIではシルビウス溝の軽度拡大以外特記すべき所見はなかった。てんかんの診断のもとCBZ 250mg/日が開始され、一時コントロールされた。12歳0カ月頃、口を開けないで話すようになった。12歳9カ月には伝えたいことが有るときには母へ、内容を紙に書いて持ってくるようになった。入院時現症(12歳10カ月)；発音が極度に不明瞭かつ文章にならないことが多く、会話は成立しなかった。また、発音の省略、誤りみられた。文章、文字読みでは、誤った発音のため、何をいっているか不明。また喚語困難がみられた。筆談が主なコミュニケーションであった。しかし聴覚的理解、環境音の理解は問題なかった。検査結果；MRI所見では特記すべき病的所見なし。終夜脳波ではspike indexは50%以下で、CSWS症候群でなく、多焦点性棘波であった。SPECTでは、左前頭、側

頭部で血流低下を示した。運動性失語の状態では SPECT での血流低下は関連あろうと推測した。入院後経過：何らかのてんかん性機序による言語中枢への影響と考え、DZP (MAX 13 mg) の就寝前投与を試みたが、効果なく中止。次に CZP による会話機能への影響の可能性も考え、CZP を 2.5 mg へ減量。しかし明らかな効果のない時点で退院。入院の 7 カ月間、言語治療を行い、軽度の改善をみたが、全体としては発語への意欲が育たない状態で退院。この間てんかん発作はなかった。退院後経過：てんかん発作なく、抗けいれん剤の変更もなかったが、14歳 5 カ月頃より、会話も改善。14歳 6 カ月には、問題消失し、構文の誤りもなく、スムーズな会話ができ、本読みも比較的スムーズと改善した。まとめ：てんかん児の経過中に一過性の運動性失語を呈した稀な例を提示した。

3) テレビゲーム中にけいれん発作を生じた児の、光過敏性の検討

佐藤 雅久・渡辺 徹 (新潟市民病院)
山崎 明・小田 良彦 (小児科)

テレビゲーム中にけいれん発作を生じて当科を受診した例の、光過敏性の検討を行い報告した。対象は、テレビゲーム中にけいれん発作を生じて当科を受診した 30 例のうち、脳波検査時に通常白色光による閃光点滅光刺激に加えて、赤色・水玉・縞模様フィルターによる閃光点滅光刺激試験を施行し得た 27 例。男 20 例、女 7 例。方法。脳波検査時に、通常の 3~24 Hz 白色閃光点滅光刺激に加えて、12.7 cm×3.1 cm の日本光電社製赤色フィルター R-21・図形フィルター (水玉 DU-22・縞模様 GO-22) を、ストロボライトの前面に取り付け、被検者の眼より 30 cm 上方に設置した。

15 Hz、20 Hz の周波数を用いて、白色閃光点滅光刺激は閉眼下で、他は開眼下で行った。その刺激で局在性または、全般性に棘波・棘徐波結合・群発波が出現した例を、光突発反応ありと判定した。27 例の発作出現年齢は、6 歳から 19 歳に分布し、中央値は 10 歳であった。9 歳から 14 歳と小学校高学年から中学生に多かった。対象 27 例の経過観察期間は、1 回のみの受診例より 10 年間の例まで様々であり、中央値は 2 年であった。既往歴では、27 例中 12 例 (44.4%) と高率に熱性けいれんを認めた。てんかん症候群分類では局在関連性てんかんが 17 例、未決定てんかんが 3 例、状況関連性発作の孤発発作が 7 例であった。光突発反応を認めた例は、27 例中 11 例 40.7

% であった。このうち、男は 20 例中 5 例 25%、女は 7 例中 6 例 85.7% で、女に光突発反応を高率に認めた。各種閃光点滅光刺激に対する光突発反応の出現頻度は、白色光では、1 例 9.1% にしか認められなかったが、赤色フィルターでは、11 例中 8 例 72.7% に認められ、うち、15 Hz では 3 例、20 Hz では 10 例中 7 例であった。水玉模様フィルターでは、10 例中 6 例 60.0% に認められ、このうち 15 Hz では 3 例、20 Hz では 4 例に認められた。縞模様フィルターでは、10 例中 5 例 50.0% に認められ、15 Hz では 3 例、20 Hz では 4 例に認められた。我々の検討では、光過敏性を 40.7% と高率に認めたが、認められない例も多く、テレビゲーム中のけいれん発作は、誘因が多様であると思われた。

4) 側頭葉てんかん患者における高次脳機能検査とアミタールテスト

青木さつき

(国立療養所西新潟
中央病院てんかん
センター心理療法士)

和知 学・前田 雅也
笹川 睦男・長谷川精一 (同 精神科)
福多 真史・亀山 茂樹 (同 脳神経外科)
細木 俊宏 (新潟県立療養所
悠久荘精神科)

〈目的〉側頭葉てんかん患者に、術前にアミタールテストをおこない、また術前後に高次脳機能検査をおこない、次の点を検討した。

1. アミタール注入によって生じた失語症状の回復時間と、検査時の年齢・てんかんの発症年齢・罹病期間・アミタールの注入量・術前の知能指数との相関
2. 発作焦点側とアミタール注入時の記憶機能との関連性
3. 術前後の知能、記憶機能の変化

〈対象〉アミタールテストは外科的治療を前提とした側頭葉てんかん患者 11 例におこなった。内訳は男性 6 例、女性 5 例で、年齢は 15 歳から 49 歳で平均 32.8 歳であった。術前後の知能・記憶機能の比較はその内の 8 例 (男性 5 例、女性 3 例。年齢は 15 歳から 45 歳で平均 30.1 歳) についておこなった。

〈方法〉アミタールテストでは言語テストとともに、聴覚性、視覚性、触覚性について逆行性健忘と前向き健忘の評価のため記憶テストをおこなった。

術前後の知能検査は WAIS-R (WISC-R)、言語性の記憶検査は三宅式言語記憶力検査と WMS などの論理的記憶、視覚性の記憶検査はベントン視覚記憶力検査